

土屋文明論考

未来短歌会創刊二十五周年記念出版

土屋文明論考

未来短歌会編

短歌新聞社版

土屋文明論考

昭和52年 5 月20日再版

著 者 未来短歌会内 土屋
文明論考刊行委員会
発行者 石 黒 清 介
印刷所 ニ ッ カ 整 版 社
製本所 (有)丸 山 製 本 所
発行所 短 歌 新 聞 社

〒166 東京都杉並区高円寺南 4-43-9

TEL 03 (312) 9 1 8 5

振替口座東京 5-21683

(分)1092 (製)000138 (出)4362 定価5000円

目 次

総論	土屋文明序説	近藤芳美	9
----	--------	------	---

I

土屋文明とその風土	後藤直二	23
土屋文明の初期作品	河村盛明	35
伊藤左千夫と土屋文明	細川謙三	46
森田草平と土屋文明	村松和夫	58
信濃時代の土屋文明	吉田 漱	70
土屋文明の再出版	米田利昭	82
「葦菁集」までの道	古明地実	98

II

土屋文明の文体	金井秋彦	109
---------	------	-----

土屋文明の思想……………	田井安曇……………	123
表現の特徴とその変遷……………	大島史洋……………	142
土屋文明における個の表現……………	河野愛子……………	155
技法上のことについての補説……………	岡井隆……………	168

Ⅲ

土屋文明の自然詠……………	川口美根子……………	175
土屋文明に於ける〈農〉の基底……………	佐々木昭元……………	190
土屋文明と弟子の一人……………	田牧久穂……………	204
土屋文明の肉親観……………	浅尾充子……………	214
土屋文明に於ける女性観……………	米田律子……………	227

資料（野場鑛太郎・吉田漱監修）

1 土屋文明年譜（吉田漱）……………	239
2 土屋文明著作一覧（吉田漱）……………	269

3	土屋文明研究文献一覧(野場鑛太郎・吉田漱)	321
4	アララギ年表(吉田漱)	415
5	土屋文明全歌集初二句索引(米田利昭・野場鑛太郎・岡本光平)	459
	資料について	591
	あとがき	593

土屋文明論考

総 論

土屋文明序説

近藤芳美

1

土屋文明の経歴、ないし実人生ともいべきものを、そのみづから記している範圍、あるいは作品の告げる世界以上にわたしは知らない。年譜によれば、彼は明治二三年（一九八〇）群馬県群馬郡上郊村（現在群馬町）大字保渡田に、農、保太郎長男として生れた。関東平野の西北限、榛名山の麓にすがる村である。火山灰地を耕すわずかな農作のほかは養蚕が行なわれる。生家は半小作農であったが父は農業をかえりみず、生糸や繭の仲買をし、あげくには石灰焼の事業に手を出したりなどして晩年村を捨てることとなる。後添いである母の入籍がおくれたため出生年が翌二四年として役場に届けられたことなども年譜に記される。幼年期に一時、隣部落の伯父夫婦に預けられて養育された。「夜々の梟も今思ひがなしあらはなる臥所に育ちたりけり」「夜ふかく父母争

ふを見たりける蚊帳の眠よ幼かりけり」等と後年に繰り返しうたわれる幼時体験は、彼の生れ育った明治期の関東農村の重苦しい因襲世界と貧困とを告げ、それは深く文明自身の文学生涯に関わっていくものだった。

その文明の幼少年時における、いわば始めての人生との出会いともいうべき小事件が彼の第一歌集『ふゆくさ』の巻末雜記において語られている。彼は中学生として高崎中学に学び始めた日に思いがけない一家の秘密を知る。祖父の「牢死」の事実である。そのためにひそかに家に寄せられていた村人の指弾も少年の傷つきやすい心と共に気付く。それが少年の心を孤独にし、孤独が文学と呼ぶものの存在を知らせる。稚ない、文学との最初の出会である。それが人生との出会いに相次いでいたことに遠い文明自身の文学の原点ともいべきものを感じる。そうして、その文明が出会ったという文学は何であったのか。

日露戦争直後、この国に西欧の自然主義思想が渡来し、主として明治三九年から四〇年にかけて、文学の主流となる。人生に、ありのままに対おうとする主張である。それは日露戦争戦後の激動と共に紹介され、人々の心を捉えた。幻想ではないところに文学があるという覚醒を、日本の文学は始めて知った。

その明治三〇年代の終りの時期に土屋文明の少年期があった。文明の高崎中学入学は明治三七年、日露戦争開戦の年であり、前述の如く文学に出会っていく時期はその戦後に重なる。「この母を母として来るところを疑ひき自然主義渡来の日少年にして」と後に追憶として歌われる、その「自然主義渡来の日」が彼の文学開眼の日だったのである。

そのようにして知った文学が一人の文学生涯において何であるかは語るまでもない。自然主義に出会ったという出発は後年の歌人土屋文明を考える場合大事な鍵となる。同時にそれは彼の文学を、彼の一世代前の歌人ら、例えば斎藤茂吉、北原白秋らと大きく分つことになる。近代短歌史において不用意に自然主義歌人などと分類される若山牧水、前田夕暮らとも全く別な出発点に立つことを意味する。ただわずかに、古泉千樫だけが文明より年長のままその青春においてやや自覚して自然主義の波をくぐったと言えようか。文明以後、近代短歌が遂げていく変質の一つの理由が、少なくともその時期を通ったか通らなかったかにあるのではなからうか。

だが、文明自身の短歌作者の歩みはその最初の出会いに拘らず、なおさまざまに屈折する。

2

少年である土屋文明は『ホトトギス』『アカネ』等に俳句、短歌を投稿することを知り、やがて国漢文教師村上成之を通して正岡子規を源流とする写真主義短歌の世界に歩み入ることとなる。ただしこの時期の、たとえば『アカネ』第一巻第五号に蛇床子の名で掲載されている「あづさゆみ榛名の山に아가立てば利根に日てりてとはしろきみゆ」等を見ても、その型式的発想は別として語法自体は完成した骨格をそなえ、一種の老成を感じさせる。早熟ということから文明の歌人としての出発はいくつかの意味を孕む。後述することとなるが、文明の初期作品ないし青春作品はほ

とんど稚拙と呼ぶ時期を経過しない。

明治四二年、高崎中学を卒業した土屋文明は同じように師、村上成之の斡旋により上京し、歌人伊藤左千夫を頼る。左千夫が正岡子規の文学の継承者であり、本所茅場町に牛乳搾取業をいとなんでいたことは記すまでもない。左千夫の好意により、やがて第一高等学校に入学し、さらに東京帝国大学哲学科に進む。

そうしてその時期に『アララギ』が新しく左千夫のもとから出刊されることとなる。島木赤彦、斎藤茂吉、古泉千樫、中村憲吉らの俊英を擁する一文学エコールの発足に、出京したばかりの文明はおのずから最年少の同人として参加する。歌人としての歩み出しであると共に、彼はすでに農民の子ではない。

『アララギ』出刊における左千夫の意図はいうまでもなく子規のリアリズムの継承であった。しかしやがてその中に師である左千夫と、赤彦茂吉ら新進同人との世代的対立がぎざし、子規から左千夫、節にむかつて継がれていく正統リアリズムにむける批判ないし反撥の上に新傾向と呼ぶべき新しい作品世界の模索が始まる。それは斎藤茂吉における『赤光』一冊の出現となり、それまで一隅の存在に過ぎなかった『アララギ』という無名集団を大正初期歌壇の主流の位置に押し立てることとなるが、第一高等学校から東京帝大に学ぶ年若い土屋文明も、当然そうした動きに追従し、その同じ新風模索の渦流に加わらなければならなかった。

そうして生れていくのが「この三朝あさなあさなをよそほひし睡蓮の花今朝はひらかず」の巻頭作品以後につづく「山の上は秋となりぬれ野葡萄の実の酸きにも人を恋ひもこそすれ」「西方に峽ひらけて夕あかし吾が恋ふる人の国の入り日か」等の、第一歌

集『ふゆくさ』前半に見られる一群の青春相聞詠であろう。それらは明らかに茂吉らの動きに同調追従するものであり、子規から左千夫、節の世代につづくリアリズムの概念で律し切れないものであった。濃い主情性の故である。あるいは浪漫性と言えよう。

記すまでもなく『ふゆくさ』初期の作品には『赤光』を主とする茂吉の影響が明らかである。その西欧的詩情の世界の幻惑に、高校から大学に学び始めた文明が共感を見出さない筈はない。茂吉は文明より九歳の年長である。身辺にあって強烈な人間的印象を伝える一人であったことはいうまでもない。

だが、その強い影響下にありながら、文明の作品には始めから茂吉と異質の部分があつた。茂吉の陶酔的ともいえる激情に対する、文明の理知である。それは『赤光』と『ふゆくさ』とを対比することで明らかである。文明の作品にはその青春の相聞詠にすら発想と表現とにわたり古典的均斉感ともいふべきものがあり、そのための知的抑制がなされていた。奔放というよりは静謐であつた。それでありながら茂吉とはまた異なる西欧的詩情の世界を濃く歌い伝えていた。知的憂愁の世界と言ふべきであらう。茂吉にとっては憂悶と呼ぶべきものであつた。

その異質性は無論二人の歌人の資質の隔りに帰因する。文明が『アカネ』の一投稿者であつた初心の日からすでに破綻を見せない古典的短歌の作者であつたことはすでに記した。しかしそのことと共に二人が経て来た青春と、青春において出会つた文学の世界——文学における西欧の世界のちがひもひそかに介在すると考えなければならぬのであらう。一高を経て文明は大正二年に帝國大学哲学科の学生となつた。それは文学史における初期『白

樺』の時代と重なる。『白樺』がその文芸運動と共にこの国に紹介した泰西芸術の世界に文明が触れなかつた筈はなからう。さらに、文明は大正三年に芥川竜之介、山本有三、久米正雄、豊島与志雄らの第三次『新思潮』に加わる。その時代から始まる「近代」とも呼ぶべき知的憂愁の世界を、青年の文明は身をもって潜り、壮年の茂吉は潜り得なかつたのであらう。

そうした『アララギ』新人らの活躍、ないし文学的離反の中に伊藤左千夫は急死する。被批判者の位置に立つ孤立の死は大正二年であつた。だが、左千夫自身もまた本当は師である子規の、少なくとも文学継承の上では批判者でありそのことを自認していた部分があつたのではなからうか。すなわち左千夫は子規のリアリズムにおける「自然」への自己限定にむけ「人生」といふべきものを対置させる。左千夫が晩年にかけて目指していたものはその子規にはなかつた「人生」の文学であり短歌ではなかつたのか。若い茂吉らとの悲劇的対立もそれに帰し得よう。そうしてそれを最も身辺に見ていたものは晩年の最年少の門人である文明だつた筈である。『ふゆくさ』初期の感覺的抒情作品ののち変転する文明の文学がたどる方向は、再びそのかつての師の「人生」のリアリズムであつたと図式的には言えよう。

3

「アララギ二十五年史」において斎藤茂吉は、その大正四年のころの動向として「歌風が素朴地味の方に動いた傾向があり、西洋詩風の趣き、感じ方、言ひぶりより、二たび日本風のいひ方に還

元しかかった」ことを記している。そのころから大正末年にかけて彼ら『アララギ』同人自身の作品に現実回帰が見られ始めると共に、しだいに島木赤彦の影響下の自然観照詠が誌面を覆い、同時にそれは歌壇全体の主潮流ともなった。晩年にかけて赤彦は短歌を「歌道」と呼び「鍛練道」ということを言い、自然に帰一する厳肅清澄な世界を文学に希求しようとした。

その中であって土屋文明は違う歩みをたどろうとした。『ふゆくさ』後半にかけて、彼の作品も又茂吉のいう「素朴地味」にむかい、西欧詩風の抒情世界を去って現実回帰の方向をとるが、それは島木赤彦ら『アララギ』と、歌壇全体の主潮流と行手を異にした。

「休暇となり帰らずに居る下宿部屋思はぬところに夕影のさす」「冬至すぎてのびし日脚にもあらざらむ畳の上になじむしづかさ」等の、彼の第二歌集『往還集』の巻頭の作品はそうした方向ともいべきものを指示する。それは実人生を負うひとりの都市生活者、小市民知識階級の生活の詠嘆であり、その索漠とした日常の中の嘆嗟の詩である。ここにあるのはすでに『ふゆくさ』の観念世界の青春抒情ではない。

そうしてその『往還集』のうたわれ出す時期は大正一四年、文明は三六歳である。それより先、大正五年に彼は東京帝大哲学科を卒業、大正七年より女学校教師として上諏訪に赴任する。このときに『ふゆくさ』の相聞作品の女性と結婚し、妻として伴う。大正後年にかけて文明は長野県の各地女学校、中学校の教職にある。そうして一三年、木曾中学校長に任命されたのを機に退職上京する。「足掛七年の間、兎も角自分の或る力を致して居た仕事

が、実質的には暴力に等しい方法で目の前に崩される」ことを見ている。そのために語られている言葉は少ない。「或る力を致し」たという、信州の教職の日々もまた多く知られず、作品に明かされているものも乏しい。それが文明の青年期から壮年期に移る人生の転機の大事な部分であったことをわしたちはその文学の推移の上にわずかに推察する他はない。

上京した文明はやがて法政大学予科教授の職につく。都会の私大教師である。そうして彼自身、すでに幾人かの子の父である。時代は大正から昭和に移ろうとし、しだいに社会不安を孕もうとする。その中からマルキシズム思想がひろがり、プロレタリア文学があらあらしい影を見せ始める。そうした時代の到来を鋭く予感するかのように「ぼんやりとした不安」の故に芥川竜之介が自殺する。かつての第三次『新思潮』の同行者であった。やがて、共產主義に対する凄惨な弾圧が繰り返される日、一方でプロレタリア文学思想は短歌の世界にも波及し「新興歌人聯盟」につづく「無産者歌人聯盟」の結成が行なわれる。文明は彼より若い世代の焦燥をこのような思想として周囲に見なければならぬ。昭和四年から五年にかけて世界的経済恐慌が日本にも及び、不況と絶望的な貧窮に民衆は苦しむ。ことに、農村の貧しさは極に達し、子女の身売りが日常とされた。リアリズムがもし現実の凝視と表現の文学であるなら土屋文明の短歌は一体何をどのような方法で歌えばよかったのか。否、その日の短歌が、と言い替えるべきであろう。その問いの答えとして『往還集』の作品は作り重ねられ、つづく『山谷集』その他の世界にむかう。文明にとり、周囲に迫り寄る現実を、市民である一人の実人生、実生活として受けとめ、

それを肉声によつて歌う他はなかった。「病む父がさしのべし手はよごれたり鍍金指輪ぞ吾が目にはつく」「父死ぬる家にはらから集りておそ午時の塩鮭を焼く」等とうたわれる作品に影のまつわる索漠とした不安感は、その無感動、無表情ともいえるあらあらしい表現の技法と共に今彼が生きていく現実を、昭和初年という時代との関りにおいて鋭く具象する。それを文明調といい散文化などと時の歌壇は呼んだ。新現実主義という言葉で分類する批評家もいた。『ふゆくさ』に始まる短歌は『往還集』に至つてこのような変貌を遂げる。青年期の主情的リリズムから壮年期の生活のリリズムにむかう、転換、ないし展開である。だが、そうした経過の中で変らないものがある。『ふゆくさ』につづく、作品の意外なまでの表現の配慮——言語と型式にわたる配慮と共に、その結果としての一首一首の古典的完成感である。この時期の作品の一見のあらあらしさに拘らず、文明の歌にはつねに隅々までに表現の知的配慮が行きわたり、語感に対する鋭い感覚と潔癖とがみなぎる。それはことばのたるみ、遊びを厳しく拒絶し、拒絶したはてのぎりぎりの働きだけを求める。その働きの見事さの故の「美」に気付かないなら散文文化などという概括的な分類に終ることとなるう。

4

昭和五年から六年のころにかけて、「身ひとつを専ら安くと願へるは吾が何時よりのことにかあるらむ」「堪へしのび行く生を子等に吾はねがふ妻の望は同じからざらむ」「力及ばぬ過ぎにし

世をばなげき来ぬ吾が父も吾もわが子等はいかに」等という作品がしきりに繰り返されていく。世界恐慌につづく後の時代である。迫り寄るものへの不安が、ひそかな保身の思いと表裏して歌われている。しかし迫り寄るものは市民の生活を脅かす不況だけではない。

三・一五事件と呼ばれる共産党の最初の弾圧があつたのは昭和三年である。そのころから凄惨な検挙が相次ぎ、組織自体は壊滅にむかうとしていた。だが、その日に、マルキシズム思想自体は日本の知識階級にとり、思想であると共に良心の問題でありつづけたと言わなければならぬ。そうして、土屋文明もまたそれを、少なくとも心の中のこととして避けることは出来なかつた筈である。

マルキシズムが文学であるとき、文明はしばしば反撥もしくはシニクな批判を言葉にして繰り返している。だが、思想とし良心として問われる問題を、彼もまた苦渋として生きていたと当然に考えなければならぬ。それと同時に彼は教師であつた。その良心の故に実践運動の世界に突き進み運命の振り曲げられていく無数の青春を周囲に見なければならなかつた。その一つの場合が例えば次のようにも歌われる。「まをとめのただ素直にて行きにしを囚へられ獄に死にき五年がほどに」素直さのほてに実践運動に加わり、悲惨な獄死をとげる「まをとめ」の一人を彼はかつての教え子とした。このような日に知識階級として生きるためにそれは幾重にも彼にからんで来た筈である。そうして、文明自身の日常は都会の一隅の小市民であり、実人生をすでに重く負う中年の生活者であるに過ぎなかつた。そうした日々の思いが前掲の作品

に、同じように生きることの漠然とした不安もしくは無力感として屈折していかないわけではない。

しかもその同じ日に、暗い次の時代の影が重苦しく周囲に迫っていた。ファッシズムと戦争である。それはマルキシズム憎悪の時のあとに必らず来るものである。満州事変が始まったのは昭和六年であったが軍ファッシズムはその前にひそかに無気味な動きを繰り返している。昭和七年には上海事変が生じ、満州国建国、五・一五事件などがつづく。二・二六事件があったのは昭和十一年である。

昭和八年のころ土屋文明は「小工場に酸素溶接のひらめき立ち砂町四十町夜ならむとす」「横須賀に戦争機械化を見しよりもここに個人を思ふは陰惨にすぐ」という、定型を破調と呼べるぎりぎりの限界までにひろげた佝僂な叙景作品を作り、時の話題となった。鋭角的な表現は冷厳、対象を突き離すかのように無表情であり、抒情と呼ぶ在来の概念を拒絶するかのようであったが、それぞれの中に、概念とは別に一つの詩の世界をおのずからに伝える。硬質な、金属光沢を思わせる新しい抒情の意味である。それはさらに「赤熱の鉄とりてローラーに送る作業リズムなく深き息づき聞こゆ」などと、これまでにかつて歌われたことのなかった巨大生産の世界の作品となり、「降る雪を鋼条をもて守りたり清しとを見むただに見てすぎむ吾等は」という、切迫した息づきをこめた重苦しい時局詠につづく。同じく非情とも言える新しい抒情の世界である。

そうしてこのような作品が、しだいに非常時と呼ばれていく戦争前夜の日に作りつづけられる事実注目する。例えば前掲の一

首「降る雪を鋼条をもて守りたり」は昭和十一年に作られ、その年に生じた二・二六事件当日の属目をひそかに素材としている。一首の佝僂する声調は、すでにそれを明らかに口にするこの出来ない日に生きる、忿怒をこめた市民である一人の文明の鬱屈を、そのまま声として伝えると言える。他の作品も同様である。一見無感動の、硬質の抒情と呼ぶものの中に、わたしは歴史の一時期に生きる不安と予感の怯えの思いを聞く。

第二歌集『往還集』のあと『山谷集』『六月風』の各歌集がつづく。このような作品が歌われる日々である。日本は破滅の戦争に一步一步むかい、狂信がしだいに国のすべてを覆おうとする。『六月風』は「世の中に用なき歌を遊び居りつつ今に言ふことやある」等の自嘲の教首で終っているが、歌われている時期は昭和十二年、蘆溝橋事件が生じ、新たに戦火が中国本土に拡大しようとする前後である。

5

国をあげて聖戦と呼ぶ戦争に狂奔した歴史の一時期をわたしたちは忘れようとしている。文学が何をしたかということも同様であり、それを問うことも又忘れられていった。だが、その日に生きた一人の文学を考える場合、避けて通ってはならないものと言える。

蘆溝橋事件以後中国本土に拡大した侵略戦は、翌一三年武漢三鎮の占領をもつて一つの限界に行きあたる。その武漢陥落を斎藤茂吉は「漢口は陥りにけり穢れたる罪のはろぶる砲の火のなか」